

運命の木 姫路城の大柱

「これは、かえなあかん。しかし、こんなまつすぐで、大きな木があるやろうか。」
高さ二十五メートルもあるまつすぐな大柱である。この大柱の交換に、改修の成否がかかっているのは明らかだった。

一九五六（昭和三十一）年、老朽化が激しく崩壊の危機に直面した姫路城の天守閣をよみがえらせようと、市民五万人の署名に後押しされた「昭和の大改修」事業が始まった。

改修の総指揮者である加藤得二は、城の中で腕組みをして、そびえ立つ柱を見上げていた。

姫路城の天守守は、地階から地上六階の床下まで東と西にある二本の大柱に支えられている。その西の大柱の内部が著しく腐食していた。

加藤は腕組みをしたまま思索していた。条件に合ったひのきを探すことは難しいと感じていた。一方で、日本は森林国なのだから、絶対に見つかるはずだという期待もあった。加藤は木材業者に依頼し、兵庫県下のみならず、ひのきが生えている山々をあたらせた。しかし、条件に合うひのきを探し出すのは容易ではなかった。

そこへ、思いがけない知らせが入った。条件に合う木が見つかったのは、森林ではなく、ある神社の境内だという。それが笠形神社の「ご神木」だった。

牛尾四郎の住む神崎郡瀬加村（現在の市川町）の笠形神社の境内に樹齢六百年にもなる大きなひのきがそびえている。

村人はご神木として、この木を代々にわたつて大切にしてきた。村の世話役の牛尾のもとへ、加藤がやつてきた。そして、彼は事情を話した。姫路城の大柱を使うために、ご神木を譲ってくれと牛尾に懇願した。

「何をあほなことを言い出すんや。そんなことできるわけないやろ！」

牛尾にも、このご神木には幼いころからの思い出がある。そして何よりも村の守り主だ。

冗談ではない、という怒りにも似た感情が沸き起こった。

しかし、瀬加村を訪れた加藤の熱心な説得に牛尾はしだいに心を動かされていった。牛尾自身、戦地で何とか生き残りしようすいして姫路に戻った時、戦災をまぬかれた姫路城の白く美しい姿に、強く心を励まされたことを思い出していた。確かに、あのお城を崩壊させてはならないと思つた。

牛尾は村人を説得してみることを、加藤に約束した。

「それは、あかん。」

「何をあほなことを言い出すんや。そんなこと考えられへん。」

牛尾が話し終える前から、村の寄り合いは騒然となつた。それは、牛尾が加藤得二から初めてこの話を聞いた時の衝撃と同じだった。

寝耳に水の話に、村人たちは猛反対した。

牛尾は何度も何度も寄り合いをして根気強く語つた。

だれにとつても難しい決断だった。

やっと村人全員が合意した。

「ご神木を切るやなんて、確かにとんでもないことや。でもな、わしらの宝でもある姫路のお城の大柱として、長く長く大切にしてもらえのと違うか。」
瀬加村の人たちの厚意に、加藤は涙が出る思いだった。
はやる思いを抑えながら、笠形神社に向かった。

「この木ならば……。」

加藤は、そびえ立つひのきを見上げ胸が躍った。さつそく木の状態を調べた。

すると、予期していないことがわかった。天に向かつて一直線に伸びているように見えるそのひのきのかなり上の部分に、わずかながら反りがあることがわかったのだ。

大柱は「まっすぐ」であることが不可欠の条件だった。加藤は、肩を落とした。

そして、集まってその様子を見つめていた村人たちに深々と頭を下げた。

「せつかく皆様に重い決断をしていたいただいたのに、申し訳ない。わずかな反りがあって、この木は……。」

加藤の失望は言葉にならなかった。村人たちに丁重にわび、笠形神社を後にした。
帰り道、加藤は何度も何度もそのご神木を振り返った。

改修の現場で、そのひのきの到着を待ちわびていた大工たちの失望も大きかった。

「これじゃ、改修は無理と違うか？」

「これだけの木は、やはり見つからんのか。」

大工の大集団を仕切っていたのは、棟りょうの和田通夫だった。彼はいら立ちを見せ始めた大工たちと言った。

「みんなが焦るのはわかる。でもな、加藤さんは我々の気持ちも分かる人や。きつと大柱になる木を見つけてくる。待とうや。」

大柱になるひのきを探し求めて一年、一九五九（昭和三十四）年の初春の段階で改修事業はストップしていた。大柱になる木が見つからないことには、先に進まないのである。

百名の大工たちは、ひたすら待機していた。

大柱のひのき探しは続いていた。加藤は木曾山中に目星をつけた。地元の林業関係者、営林署職員らが巨大なひのきを探した。協力してくれる人たちは、

「我々で姫路城の大柱になる木を見つめよう！」

と、道のない山中を探し、だれも足を踏み入れたことのないような奥深い斜面にも足を運んだ。これが最後の機会と、加藤も腹を決めていた。

しかし、なかなか見つからない。一カ月が経ったが、やはり駄目である。

「もうそろそろ潮時では……。」

そんな声が耳に入ってきたが、加藤は粘った。

「もう少しだけやらせてくれ。」

協力者たちも加藤の熱意に応えようと、また山に入っていた。

そんなある日、一人の作業員が道に迷って獣道に入り込んでしまった。そしてそこで巨大なひのきを見つけたのである。

その知らせを受けた加藤は、現場に急行した。確かに巨大なひのきがそびえ立っている。これなら、いける。」

加藤は確信した。懸念した反りもない。

「これで姫路城を修復できる。」

加藤は、その巨木に手を合わせていた。

奥深い山中で、加藤は伐採までを見届けた。

そして姫路に戻り、巨木が搬送されるのを待つことにした。

久しぶりに我が家に戻った加藤は、安ど感に包まれていた。これでストップしていた改修作業が再開できる。崩壊の危機にある姫路城を救うことができるのだ。加藤は、風呂につきりながら、これまでの日々を振り返っていた。

風呂上がりの加藤に、一通の電報が届いた。加藤は電報を読み、がく然とした。

「シンバシラ オレタ ムネン」

ひざから崩れ落ちた加藤は、しばらく電報を握りしめたまま、動けなかった。

巨大なひのきは山の斜面を慎重に運ばれたが、もう少しで平たんになるところで落下し、あつげなく真つ二つになったという。あれだけの時間をかけ、数え切れないほどのたくさんの方の協力を得て探し当てたひのきは、もはや大柱として使えなくなってしまった。

加藤の落胆は激しかった。

「万事休すだ……。」

加藤はふさぎ込んでしまった。

棟りょうの和田が訪ねてきたのは、加藤が電報を受け取った数日後だった、大きな風呂敷包みを抱えていた。いぶかる加藤の前で和田はにやりと笑い、その風呂敷をほどいた。

包みの中から出てきたのは、凹凸で組み合わされた木組みの模型だった。

「加藤さん、この手があるよ。短くなってもこうして二本をうまくつなぎ合わせることができれば、立派な一本の木になる。」

「つなぎ……合わせる……。」

「そうや、まだあきらめたらあかんで。」

木組みの模型を見つめていた加藤は、視線を和田に移した。そして大きくうなずいた。

加藤はすぐに現場へ向かった。落下現場で折れたひのきを見た。一本の柱としては使えないが、幸い折れ口がきれいで、手を加えればもう一つの木とつなぎ合わせることが可能だった。

「もう一つの木……。」

加藤はその足で瀬加村に向かっていた。道中、複雑な心境だった。村の人々に重大な決断を迫りながら、わずかな反りのためあきらめざるを得なかった笠形神社のご神木。

果たして今さら、この木組みの案を受け入れてもらえるのだろうか。

牛尾に会うのは久しぶりだった。

加藤は村の人たちに事情を話した。

「加藤さん、このご神木お譲りいたします。姫路城の大柱としてお使いください。わしらの大切なご神木や。どうか、よろしくお願いいたします。」

牛尾が言った。

あの時、村の人たちの総意で腹を決めたのだ。この申し出を断る理由はなかった。

「大事なご神木、大切に使用させていただきます。」

そう言つて、加藤は牛尾の手を固く握つた。

その年の夏、笠形神社のご神木と、木曾山中の折れた巨木が、姫路市内を祝い引きされた。およそ十万人の市民がその二本の木を見ようと、沿道を埋めた。

九月、棟りよう和田の指揮の下、腕の良い大工たちの技でその二本の木の木組みが行われた。その木組みには、ご神木を譲る決断をしてくれた瀬加村の人たちや、残雪の奥深い木曾山中をひのきを求めて歩き回つてくれた人たちの願いが込められている。

加藤は祈つた。

つなぎ合わせの部分の巧みに凹凸になつた二本の木を巻いたロープを、大工たちがこん身の力で引いた。そして、その二本の木は、まるで一つの大柱になることが運命づけられていたかのようになり、見事に木組みされ、一本の巨木になつた。

姫路城は姫山に天守閣が、鷲山に西の丸が築かれた平山城で、日本における近世城郭の代表的な遺構である。白鷲城とも呼ばれ、現存する城としてはその美しさにおいて他をりようがする。

一九九三（平成五）年、ユネスコの世界文化遺産に登録された。

天守をいただいた純白のたたずまいは、見る者だれをも魅了する。

しかし、半世紀以上も前、多くの人の情熱によって木組みされた二本の運命の木が西大柱となつて、この美しい城を支えていることを知る人は少ない。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。